

# 三十二年目の富士山

板東 洋三郎

「今度友だちと富士山に登るのよ。私初めてなのでとても楽しみ」

特養で夕食の介助をしている私の隣のテーブルで、若い女性の職員が他の職員と話しているのが聞こえた。「富士山に登るのよ」その一言は、一瞬にして私の長年の思いに火をつけた。

仕事が一段落するのを待って、若い人ばかりのそのグループに参加させてもらえるかどうか尋ねた。年齢はどうしようもないことながら、私には二年ほど前に起こした急性心筋梗塞の既往症があることも話した。医師からはすでに許可をもらっていることも告げ、後日リーダーの看護師にも承諾してもらった。登山の二か月ほど前のことである。

準備をし始めると、登山の実感がわいてきて、単純にうれしく心が弾む思いであった。最後にこんな気分になったのはいつごろだろうか。

富士山の姿が私の脳裏に刻まれたのは、横浜港を去る移住船の夕方の甲板であった。六十年代の学生運動に挫折した私は、大学を中退して、同じような境遇の若者たちが作った、ブラジルに「青年の村」を起こそうというグループに参加していた。短期間で資金を作る必要があった。そのために私たちは、日夜青梅街道や甲州街道を上下し、沿線の住宅街で廃品回収をした。

当時、移住者は家族単位でしか受け入れられなかった。独身者は現地での呼び寄せ人が必要であった。そのために私は、東京の練馬区にあった独身移住者の訓練所に入った。そこは戦前戦後を通じて多くの移住者を中南米に送り出しており、修生には呼び寄せ人を紹介してくれたからだ。ブラジルの言語、文化や習慣、移住史などからなる六カ月の訓練を終えた私は、グループの先発として単身横浜港から日本を後にしようとしていた。

見送りに来た大勢の人々を岸壁に残し、もの悲しい汽笛とともに静かに船が動き

出す。甲板で叫ぶ人々の声が静まり、手すりに絡んでいた色とりどりの紙テープも風にちぎられ波に消えて行く。横浜港が夕暮れの水平線に飲み込まれて見えなくなると、不思議なことにそれまで気付かなかった富士山が、淡い夕陽を背にくつきりとみえた。あたかも家を去る子が見えなくなってもなお、背伸びをして見送る母親のように。私がこの目で見た最後の「日本」は富士山であった。間もなくそれも夕闇の水平線に消えて見えなくなり、私は船室に降りた。

パナマ運河経由で、四三日の船旅の後サントス港に着いた。私は、サン・パウロ州の奥地のコーヒー園で働きながら、「青年の村」の準備をし、後続隊を待った。一年余り後に八名全員が現地に集合し、希望に満ちた共同生活が始まるはずであった。ところが、私の渡航後に結婚していたリーダーの顔がさえない。その夜の会合で彼の重い口から語られたのは、農場を買うために私たちが廃品回収をして貯めた資金が、彼の失策のために消えてしまったということだった。詳細の説明もなかった。このことは同船のメンバーにさえ語られていなかった。二年以上の労力を費やして進めてきた計画はあえなく水泡と帰ってしまった。しかし、不思議なことに非難の応酬や、嘆きの言葉は誰の口からも語られなかった。それほど衝撃は深く大きかった。数日後には各自それぞれの方向に向かい、再び会うことはなかった。

それから二年余り後、あるきっかけから私は、サン・パウロ市内のある大学の神学部に入學した。卒業後、北米のワシントンに世界本部があった、あるキリスト教会の牧師として働くことになった。しかし、日々接触する多くの人々が、健康の問題を抱えて苦しんでいる現実に驚いた。祈るほかに彼らの必要に応えることができないのが悔しかった。三年後、私は牧師をやめた。グアテマラのアンチーグアにあった自然療法の医院で健康教育の研修を受けるためであった。世界の多くの国から若者たちが集まっていた。ベトナム戦争後で、薬物中毒を克服したい元兵士もいれば、反戦運動の名残のヒッピーたちも多数いた。ピーター・ジェンフィのようにアフリカの部族の王子もいた。夜になると活火山の噴火が見え、毎日のように地が震えた。三歳の長男と二歳の長女がいた。次女はその地で授かった。

二年の研修は隣国ベリーズの健康教育センターで終わった。ブラジルに帰国する旅費を作らなければならなかった。家族をそこに残して陸路でメキシコを縦断し、徒歩でテキサス州に入り、夜行バスでロサンゼルスに移動した。数か月後、家族を迎えに行った。半年後必要な資金もできたのでブラジルに帰る準備をしていた。ちょ

うどそのころ、教会からブラジルのアマゾン川下流の地域で働いて欲しいとの招聘を受けた。そのことでブラジルへの移動の費用が保証されたので、赴任する前に家族と共に日本の親に会いに行くことにした。父親は、私がグアテマラの山中にいたときに亡くなっていたが、母は老齢ながら健在であった。妻と三人の子供たちにとっては、初めての日本だ。年の瀬が迫っていた。

「皆さま、あけましておめでとございます。先ほど日付変更線を通過いたしました。日本では元旦でございます。間もなく前方右手に富士山が見えて参ります」客室乗務員のさわやかなアナウンスに、機内の窓が一斉に開けられた。朝日に輝く雲海のかなたに目を凝らしていると、真っ白な富士山の頂上が浮かび上がってきた。機内に歓声がどよめいた。そのときの感動はその後も忘れることはなかった。十三年前、横浜港から日本を出ていく独身の私を見送ってくれた富士山が、今初めて日本に来る妻と三人の子供たちと私を迎えてくれたのだ。あたかも両腕を開いて待ち続ける父親のように。

「いつかこの山に登ろう」その時私は自分に言った。

「今度友だちと富士山に登るのよ」

私の「いつか」が、小耳に挟んだこの一言によって、三三年後に実現のきっかけを得たのだ。ちょうどそのころ、富士山の世界文化遺産の登録が発表された。テレビでは山開きの前から、連日のように関連の番組を放映していた。どの番組も混雑した登山道を見せていた。私の周りにも、高山病のために頂上を目前に下山を余儀なくされた人もいた。「もう二度と登らない」と最初の下山後に誓いながらも、四度も登山した人もいた。

私にも私なりの心配はあった。今も心筋梗塞の薬を飲んでる身だ。医師の許可をもらったとはいえ、保証ではない。周りに迷惑はかけたくない。もちろん、二度目の発作など想像したくもない。

ブラジルにいる息子に登山のことを話した。

「パパイ（父さん）がグループで一番若いんなら心配だけど、そうじゃないらしいから心配しないよ。行っておいでよ」

スカイプの向こうで彼が言った。それもそうだ。二人で大笑した。心配は吹き飛

んだ。よい仲間とガイドと天気恵まれ、全員支えあいながら、無事登頂。未明に八合目の山小屋を出た。上を見ると凜とした夜空に満天の星。下を見ると登山者のヘッドライトが移動する蛍の大群のようだ。

しかし、頂上に近づくにしたがって、空模様が急変した。頂上に立った時は激しい風に横殴りの雨で、立っているのが難しいほどであった。ほぼ目の高さで荒れ狂う黒い雲海の果ての切れ目から、鮮やかなご来光が閃く。そのたびに大きな歓声が起こる。

初めて日本を離れるとき、横浜の沖から見た富士山。それから十数年の後、家族を連れて初めて帰国した時、雲海の果てから早々と迎えてくれたのも富士山だ。今の職場からは県境の山並みの向こうに、四季を通じて朝日夕日に映える頂上が見える。

奇しき富士山を見つつ時にひとり思う。我が来しかたと、そして、辿るべき道程を。